

ボストンマラソンへの思い

池上 孝則

ボストン爆破テロ事件について、作家の村上春樹氏が3日付の米ニューヨーカー誌（デジタル版）に寄稿したとする記事が、5月5日の朝日新聞に掲載されました。

私は、恥ずかしながら村上氏の本を読んだことがありませんので、急いで「走ることに語るときに僕の語ること」と題するエッセイを購入し、読んでみました。



文系と理系、作家と研究者、ヤクルトファンと広島ファンなど、基本的な違いは沢山あるのですが、ことマラソンに対する考え方は概ね共感できるものでした。

というよりは、自分がマラソンに対して抱いている漠然とした感情を見事に文章化して頂いたという方が適切かもしれません。

「勤勉で我慢強く体力があるというのが、昔もいまも僕の唯一の取り柄である」と自分のことを評されていましたが、“勤勉”を“まめ”に置き換えればほぼ自分に当てはまるし、「放っておくと肉がついてくる体質」というのもズバリ。

何より共感したのは、たとえば、以下のような仕事と健康の関係についての下りです。

「僕にとって小説を書くのは、峻嶲な山に挑み、完璧をよじのぼり、長く激しい格闘の末に頂上にたどり着く作業だ。」とし、「基礎体力の強化は、より大柄な創造に向かうためには欠くことのできないものごとの一つと考えているし、それはやるだけの価値のあることだ（少なくともやらないよりはやった方がずっといい）と信じてる。」とあります。

私は、「研究とは暗闇のジャングルから生還するようなもの」だと思っています。その際、もちろん携帯電話もGPSも懐中電灯もなく、頼れるのは自分の野性と体力だけです。



作家や研究者だけでなく、創造を伴う仕事に携わる人はこうした過酷な運命にさらされているということでしょう。いや、どのような人生であれ、創造性を伴わない日常などないのではないでしょう。

そんな日常の中で、マラソンという過酷な競技に挑むことを決意し、準備し、レースでもがき、気持ちをごまかしつつ完走し（または棄権し）大会を終える。こうした体力及び精神の揺さ振りが、長くて孤独な人生における闘いにおいて、何らかの効用を生み出しているのでしょう。



「フロントランナーの孤独」とでもいうべき状況における掛け替えのないパートナーがマラソンということかもしれません。

そんなマラソンというパートナーと共生する村上氏が、かつて6回走ったボストンマラソンの爆弾テロ事件に関して寄稿されました。

私は、1996年の100回記念大会（写真）を一度走っただけですが、ボストンマラソンに対する思いは村上氏と変わらないと思います。

ボストンマラソンを敬愛し、お手本としてきた市民マラソン大会も少なくないでしょう。我々も、偉大なるボストンマラソンに対し、日本の市民マラソン大会としてのメッセージを送ることができればと思っています。

なお、レース中の二枚の写真は、後日、ボストンマラソン大会から手元に送られてきたもので、その内の一枚は招待選手の山田敬蔵さんに追いついた瞬間を捉えたもの、もう一枚はゴールの様子です。

山田さんは75歳までサブスリーで走られていたそうで、この大会でも一度は追い抜いたものの、40km付近で再度追いつかれ、置いていかれました。1996年のボストンは日差しも強く、相当に暑い一日でしたので、実質的にサブスリーに値する記録でこの大会も走られています。

ゼッケン番号1953は優勝年にちなんだもので、山田敬蔵さんのみが付けることを許されている永久欠番です。

こんな形で歴代優勝者をリスペクトしているなんて、なんてハートフルな大会なんでしょう。

